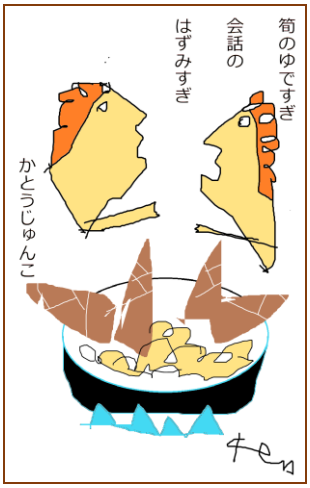
行先は俺も桜も同じ土

木村　浩

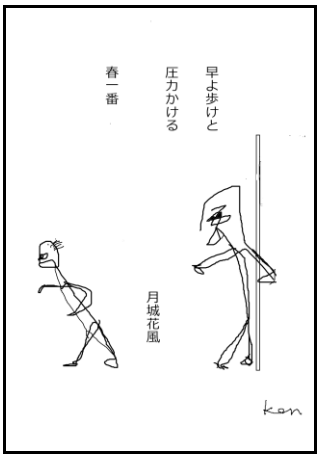
この句には哲学がある。哲学とは人間とは何かを考える学問である。この句を表題にして、新しい切り口の哲学論文を書いてみてはどうだろうか。



筍のゆですぎ会話はずみすぎ

加藤潤子

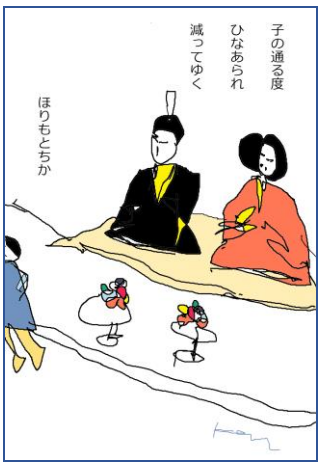
原因と結果の句のようにも見えるが、どちらが原因なのか曖昧なところが可笑しい。原因は、筍と会話の双方にあり、同時進行と考えよう。



早よ歩けと圧力かける春一番

月城花風

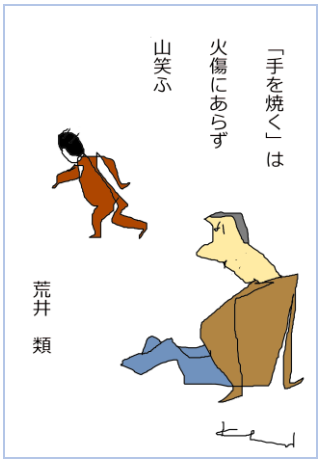
春一番の特徴をよく捉えている。春一番は、強風のトップバッターとしての誉れを鼻にかけているのだ。さっさと歩けとは余計なお世話だね。



子の通る度ひなあられ減ってゆく

ほりもとちか

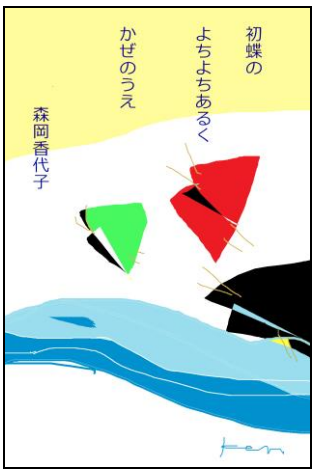
あられの山が少しずつ小さくなっていく。犯人は特定されているが、気が付いていない振りでそっと足す。犯人はバレているとは知らずまた犯行を。



「手を焼く」は火傷にあらず山笑ふ

荒井　類

「手が後ろに回る」「腕が上がる」「指をくわえる」など、字義通りの意味とは違う意味をもつ言葉がたくさんある。日本語の魅力の一つである。



初蝶のよちよちあるくかぜのうえ

森岡香代子

俳句では、まだ誰も使っていない、全く新しい表現が見事にできた時、「お手柄です」などと褒められる。「蝶が風の上を歩く」という発見がそれだ。